
転生者のごとく！

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者のごとく！

【Nコード】

N2436BA

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

ある日、よく分からんが死んでしまった俺はテンプレな転生に恵まれず、なんか身体能力が、上がっただけで、何の世界か分からないまま転生。しかも数年後、駆け引き大好き親共借金を押しつけられ、黒の組織みたいな奴らに追われて、よく分からん内に関西弁の少女「愛沢咲夜」なる人物に建て替えられた俺の借金を返すために、よく分からないまま、愛沢咲夜の執事になる。って……よく分からないまま多くね？

ハヤテのごとく！の二次創作です。メタ発言多く、更新不定期です

が、よろしく願います!!

テンプレって実は運がいいのだと言う（前書き）

こんにちは、ええ、色々な小説の更新が止まっていて、更新すべき小説をこの一ヶ月更新してないで、この小説を書いたカッシーです。始めまして、またはこんにちは。

最初オリキャラしか出ません。うん。すみませんした！！（何故？）

テンプレって実は運がいいのだと言う

最初に言わせてもらおう。俺はこう願った訳だよ

なんか死んでしまつて、あつ、殺しちゃったごめんなさい。てへぺろ。みたいな感じで神様のなのが出てきてそのお詫びに初期からチート性能を持つて転生して色々と騒いで、かつこよくフラグを立ててハッピーエンドで、終わらせる。そんな展開を俺は望んだ訳だよ。

だが、人生そう上手くは行かない。例えば転生に成功したとて、なんか色々とかまったりするはずだよ。

うん。それが俺。転生に成功したけど、なんの世界かしらねえし、なによりチート能力も、持ってない。ただ、運動すれば伸びるらしい。

当たり前だけれどもね

そんな俺の話をするにはまず、神様みたいな人と会うところから話し始めなければ、長くなるが聞いてくれると嬉しい。

つてか、今ナレーションしてる俺、もう出番終わりだから。過去の俺にバトンを回してあげようじゃないか！！

だが、これだけは知ってほしい。

人生ってそう簡単に上手く行かないんだって

――

どうしてでしょう？何故かさつきまで、公園で遊んでたはずが、レインボーな空間の中、立ってる。いやいやいや、なんだこの世界。僕、なんか悪いことしたっけ？

.....

いや、教師とかに消しゴム投げたり！そんな事はしたりしたけども！！別にそんなにくだないだよ！こんな世界にいきなり迷い込むなんてど

んだけ教師に消しゴム投げる事が悪い事なんだよ！！

注、こんな事をやる人は悪い人だよ！良い子の皆は真似しないようにネ！ってか僕は悪い子だからやってもいい（ry

そんな事を考えているといきなり眼鏡かけた人物が現れました……

え、なにこの罰ゲーム。こんな眼鏡外すと可愛いてきなギャップ萌えのキャラの人に舌抜き地獄とかやらされるんですか！

地獄は思った以上に怖い所だな

そんな事を思い身震いをする。ヤバイ近づいてきた………あー、このレインボーな地獄で俺は殺されるのか………お父様、お母様。さようなら。僕を育ててくれてありがとう。

「この度は「すいませんでした！！！」………え？」

うん？ちよつと待て。今、なんかこの度はって言わなかったか？そして俺。冷静に考えろ。大体こんな所に地獄があるのか？

「あゝすみません。ここって、どこっすかね？」

「えーと、神様の家の多目的室ですが………」

「………」

あー、多目的室ですか。その前の神様やらなんやら云々はおいといてさ………言わせてもらつとさ………

「どうなっちゃってんのこの世界!!!!」

公園を抜けた先は多目的室でした。どこどこでもドアだよ!!!
これじゃああのネコ型ロボットもなんでこんなに早くどこでもドア
が……と言って驚きの表情だよ!

きつと!!!!多分!!!!

「あ、申し遅れました。私、神様の秘書。天使です。よろしく願
いいたします」

天使って……きつと作者がこの一回だけの登場だしべつに名前な
んでどーでもよくね?みたいなノリだったんだろっね

と、その前に

「えーと、どうして、僕はここにいるんですかね?トンネルの先は
雪国という事はわかりますけど、公園の先がこんなレインボーな多
目的室なんて。あり得ませんよ?」

多分人間で始めてなんだろう!嬉しくてなんか目からなにかが垂れ
てきたよ

「ああ、詳しくは神様から聞いてくださいな」

そっ言うお、なんか急に視界が暗くなって、すぐ、明るくなった。
目の前にいたのは……

「ああ、お前か……部下のクソ野郎のせいで死んじゃった野郎は」

目つき悪……なにこのひと……えっ！侵入者ですか！ってかどこっすかここ……しかも、俺、貴方様の様な輩と戦いたくない！

「神様。その通りでございます」

うわあ
ああ
ああ
ああ
ああ
ああ
ああ
！！！！！！

神様ってこんなだったのかよ！！え？ちよつ！大丈夫だ、呼吸をしろ、俺。頑張れ。なんとかなる。そうだ、頑張れおれ！

「で、俺はなんでこんな所にいるんですかね？」

「ああ、死んだから」

⌋
⋮

-
-
-
-
-
-

-
-
-
-
-
-

え？

「だから死んだんだって」

一瞬、全ての思考が止まった。何故だろう。とにかく止まった。止まってしまった

[illegible]

「うっせえよ!!」

叫んだ瞬間怒鳴られた。怖い。やっぱりこの人怖い

「俺の部下がちつと仕事に失敗してな、運悪く、お前が死ぬ運命にあった」

「たつた少しの失敗で？」

「ああ、大丈夫だ。精神的に死刑にしといたから」

「……」

大丈夫じゃないだろ、という突っ込みを抑えて恐る恐る聞いてみた

「で、死因は？」

「聞きたいか？」

「……」

つばを飲み込み、意を決して頷く。なんだ……とてつもなく嫌な予感がする

「石でつまづき打ち所悪く……直ぐに息を引き取った」

「……」

聞くんじゃなかった

「それで、俺をどうする気なんですか？」

「いや、決まってるだろ？転生だよ」

「……え？マジで？」

ヤバイ、死んでよかったかもしれない

「大マジ」

この神様マジで拝むレベルだわ。感謝します。ありがとうございます。神社にもつと行けばよかった 現金な奴

「で、能力は？」

「は？なにいつてるんだ？なにに決まってるだろ」

「……へ？」

「なんでも貰えると思うな！狩れ！狩るんだよ！！」

「なにをだよ！！」

「ああ？」

「すみませんでした。調子乗りました」

うん。突っ込むのはやめよう。次は俺の命が危ない

「とにかく、身体能力は上げておこう、ゴムゴムのなんとかとか、死ぬ気でなんとかとか、その幻想をなんとかとかその類の能力がもらえると思ったら大間違い！人生そんな甘くねえんだよ！！」

「ええー」

納得出来ない。

「で、どこに行くか「ランダム」……」

もういいや、突っ込むのめんどい

「じゃあ行つてらっしゃい。さつさと死ねよ」

「結局、ほとんど私出てないじゃないですか」

「はい。じゃあさようなら」

さつさと行こうこの人達、僕は相手に出来ない

そして、俺の視界は暗闇に包まれた

テンプレって実は運がいいのだと言う(後書き)

感想、アドバイス待ってます!!

困った時は相談した方がいい。これ常識（前書き）

関西弁が予想以上に難しい

困った時は相談した方がいい。これ常識

「ハアハアハア……」

気付けば公園に着いてた。額の汗を拭う、どうしてこうなった？

皆さんお久しぶり。只今13つまり中学一年生の乾　ハヤトです。
ハヤトはまあ、ホントは隼人って書くんだけども何故かそうしなきゃ、いけない様な気がするからカタカタにしておこう

そんな俺がどうしてこんな汗だくで公園にいるかというと、追われているから

まあ命がけの鬼ごっこ。いわゆるリアル鬼ごっこって奴

うん！笑えないや（泣）

まあ、ことの成り行きはというと三十分前に遡る

「金が……アレ？」

新年、一月一日、初詣から家に帰ってくるとなにもなかった。ただ一つの便箋を除き、

便箋には『ハヤト君へお年玉』と書かれてあった。

「おお、今年はいくら入ってるかな？」

それを見た途端、なにもないということを忘れて便箋を切った

ウチの親共は自由主義だ。ってか仕事ではなくパチンコ、競馬、麻雀、などなどをして金を稼いでる。無論、そんなもので稼いではないと思っていたのだが、実際立派なほど稼いでいたので、その年の儲け金額によりお年玉、お小遣いなどなど、お金に関わるものはすべて変わるのだ。

それが結構スリルがあって俺は好きなのだ。

だが、それも今までだった。

「あれ？」

落ちて来たのは、紙と、落とし玉と貼ってあった玉だけだった

「え？なにこれ？」

くだらな……！！

え？今年のお年玉なし！？どうしてくれんだよ……！！

そう思い落胆しながら、紙を拾う。

「何だこれ？」

拾った紙にはこれこそ人生を左右するような事が普通に書いてあった。

『借用书 ¥ 8 4 ・ 6 0 8 ・ 5 0 0 』

「……え？」

一瞬目を疑った。ええと八千四百六十万八千五百円……

ええと……横には『頼んだぞ、わが息子よ』

「……え？」

紙の中にまた小さな手紙があった

読んでみると

「……」

『あ、ゴメン溜まりに溜まってた借金、限界みたい。大丈夫だ！お前なら出来る！！あ、そう言えば一応ちよつと知り合いに臓器、金で売るつつたから、返すかどうかしないと、お前死ぬよ。まあ大丈夫。お前なら出来ると、私達は信じてるわ』

パパ、ママより』

「オラあ！！乾、金か臓器出せや！！」

「……」

やべええええええええええ！！！！！！！！！！

どうやって逃げればいいんだよ！！！！

あつ！そうだ！

窓は……よっしゃ！開いてる！！

すぐさま窓を飛び越えてダッシュして逃げる

「待てやコラアアアアアア」

俺は昔イカサマをやってたんでね！逃げ方は熟知してんだよ！！

まあ、したくなかったけれども

ってか、なんですかねコレ！俺、あきらめて、普通に生きようかな
と、思ってた矢先なんなんでしょうかコレ！

*
*
*

「ふう………まいた」

つ………疲れた………やっぱチート能力は欲しい。どんな平和な世界で
もこんな世の中一つぐらい持ってもいいんじゃないのかな？

「ハアハアハア」

ってな訳で冒頭シーン

どうしよ、もう頼るとこない。考えてもみるよ。親が仕事してなければ、他の親が乾君には関わらない方がいいとかいうから昔から友達なんてほぼ、いなかったし。親戚なんて知らないし……

いっそ、この寒さだ。凍死してしまおうかな

「どないしてん？」

よく考えれば、これが俺の大きく運命を変えた一つだった。いや、もう運命の出会いとかそんなレベルだった。

「へ？」

不意に尋ねられ後ろを向くと小学生ぐらいのショートカットの少女が立っていた

「だから、どないしといねんって」

ああ、俺はついに小学生に心配されるようになったか……ハア……

「いや、なんでもないから、大丈夫」

「いや、絶対なんかあるやろ？ウチ暇だから相談のるで」

「いやいや、なんでもない」

「相談のるでって」

「いや、だからいって!」

「あ、いってと言う事はなんかあるという事やる? な、乗らせてくれ。お願いします」

「え?」

なんでしょうがこの展開、相談乗らせてくださいってお願いさせられたのは初めてなんけども

まあ、小学生だし……いいか

「わかった。相談するから。ジュース買うからちょっと待ってて」

「ホンマ!ならウチ、オレンジジュース頼みますわ」

「え?」

「ありがとな」

ああ、残り少ない全財産が……ああ

「で、温かい飲み物じゃなくてよかったの？」

「別にいいんだよ。ありがとな。で、相談してくれるんちゃう？」

「ああ……実はな……」

で成り行きを説明をした。

「そんな事があつたんか……」

「え？なにその反応」

「いや、こんな重い話で、どう反応していいか分からなくて……」

うん。やっぱ。中学生がこんな相談びつくりするよな

「正直お笑いの話かと」

「ないから!!」

「え? ないん?」

「いやいや、あんな深刻そうな顔してお笑いの話とかないだろ!!」

「いや、例えばなんで、いつもガキ使では松本が叩かれる数が多いんだろ……とか」

「ないから!!!! そんな深刻そうな顔してガキ使の事、考えないから!!!!」

「え、そうなん?」

「そうだわ!!!!」

夜の公園に俺のツッコミが炸裂する

「損したわ、損。お笑いの事かと思ってた」

「ねえよ! 正月にしかもこんな場面なのに考えねえよ!!!!」

ああ、もう! 相談して損したわ!!

「じゃ、かえ「行くあてないんやろ?」……ごもつとものです」

このまま寝ると俺、凍え死ぬ。

「うち、泊まってく?」

「え?マジで?」

「マジや。ウチ、アンタの事気に入った」

その時、俺の瞳が光ったのは間違いないだろう

困った時は相談した方がいい。これ常識（後書き）

感想、アドバイス待ってます!!

夢に見る城って結構身近にあったりする(前書き)

今回と次はギャグ殆どないです。あと、今回短いです

夢に見る城って結構身近にあったりする

「……へ？」

「「「「「お帰りなさいませ！！！咲夜お嬢様！！！」」」」」

「うん。帰ったで」

どうしよこの状況！！目の前にあるのがお城って……すみません。
ここ練馬ですよね？東京のあの練馬ですよね？

実はこの場所は日本じゃないみたいなのりじゃないよね！！

コホン、取り乱しました。

うん。いいたい事は一つ。ここって何県つかね？いや、何国つかね？

「入らんの？さつさと、入らんとドア閉めるで」

「行きます、行きます、行きます！！！」

閉められたら、死ぬという選択肢しかない俺はダッシュで玄関まで走る

「ふう……」

「なんや、お前足早いやないか」

「あ、そう？思った事なかった」

「いや、今の走りで気づかないなんて……まあいいわ、とにかく、そのリビングで休んどいて」

そう言って右にあるリビングをさす。

……あ、あそこがリビングっすか。そうっすか。俺の家の大きさ以上の大きさっすね

なんだこの敗北感。まあとにかくリビングで待ってよ。話しはそれからだ。

「ふう、ゴメンゴメン。父親と電話してて遅れてしまったわ」

「いや……別に大丈夫だけでも……え？は？」

「旅行や旅行。なんかよく分かんが、あと、数日したら帰ってく
ると思うで」

「という事は一人で家にいるの？」

「ちゃうちゃう。家にはSPがいるし。全く
、むしろ静かでいいわ」

「……」

SPって……ああ、さっきのお帰りなさいませ……！とか言ってた
人か……金持ちすげえ……大体練馬にこんな敷地あったのか？やっ
ぱ、ここ日本か？

ま、まさか俺は未来に……

……

現実逃避やめよう。うん。現実逃避はいけな
い。

「あ、名前言ってなかったな。ウチの名前は愛沢咲夜。アンタはなんて言うん？」

「俺の名前は乾ハヤト。よろしく」

「タクミな！よろしく！！」

と言って握手を交わす。なんだこれ

「そう言えばどうするん？八千四百六十万八千五百円」

「……」

その事考える前に記憶力よすぎだろ！！と突っ込みたかったがやめよう、仮にも家にとまらせてもらってるんだ。突っ込むのはなしにしよう

「まあ、今日一日この家で考えたらいいと思うで」

「うん。そうさせてもらう。ありがとう」

「礼なんてええて！まあとにかく……国枝！！巻田！！この方に部屋を貸してやってや」

「は！！！咲夜お嬢様！！！」

なんだろう。さっきまで全く人が周りにいなかったのにいきなり人が現れたのは何故だろう！！

あれだな……世界の前に日本が広いということも知っておかなきゃな

「ああ、はいこれ。アンタにやるわ」

「へ？なにこれ？」

「部屋の見取り図。ないと結構迷うから気をつけてや」

「お、おう。ありがとう」

……「こは、もう何度も言っけど、練馬なのか？」

「じゃあ、風呂は自由に使ってええから」

「では、お客様。こちらです」

そう言っただけで案内される。最早どうしてこうなった？というレベルだが素直に感謝すべきだろう。うん。

「うわぁ……」

え？なんすかねえこの広さ俺の家（最早ないけど）より数倍でかいっすよね

……

ってかどうしよう。やっぱ働いて返すべきだけでも……あの雰囲気から見て絶対に「あ？臓器売った方が早いだろ？」とかなんとか言っただけで働く前に死ぬだろ。

……

ダメだ！そうになっている自分を考えるんじゃない！！感じててもダメだ！

「はぁー。さっさと寝よ。」

風呂は明日入ればいいや。

そう思ってもう布団に入る

……あったかい

こんな暖かい布団に入っただの何年ぶりだろう。

いや、初めてかもしれない。親も遅かったし、まあギャンブルやってただけだと……

急に瞼が重くなってきた。ああ眠い……眠いよあゝ

「きて……きてください」

どこからか声がする。

「起きてください!!」

「はい!!」

耳元で言われた。イタイ、

窓をみるとまだ真っ暗。今何時だ？

「大変な事になりました!!」

「へ、何が？」

まだ頭がぼーっとする。だが、次の言葉で、目が覚めた。

「咲夜お嬢様が誘拐されたのです!!」

「え？」

その瞬間、俺の体がかつてに立ち上がっていた

夢に見る城って結構身近にあったりする（後書き）

次の話しで、ハヤトが執事になります。うーん次の話しも多分ギヤグなしだからなあ……
どうしよ

最終的に助かってしまう主人公補正は最強（前書き）

今回、原作と似てしまったなあ、まあ読んでいただけると、ありがたいです！

最終的に助かってしまう主人公補正は最強

「うおらあああああ!!!」

こんばんわ、ハヤトです。今、車を追いかけて自転車です。走っています。なんでかって？そりゃあ助けるためだよ。誰をかって？

そりゃあお嬢様に決まってる……ってね

「ちよっくらいつてきます!!」

「ちよつと待ってください!どうやって行くんですか?誘拐先も分からないんですよ!」

「……どこにいるんですかね?」

さっきの場面から三十分ほど前、早々と着替えて、自分でも何故か分からないが助けなければいけないという思いが体中を駆け巡っていた。

名もなきメイド(まあつまりモブ)に起こされ、咲夜さんが誘拐されたらしいと聞かされた。

「一応電話が来た時、瞬時に逆探知に成功したので、場所は分かりますけど……というか誘拐犯は車で移動しているのでどこにいるかはもう分かりきってます。ただ……」

「ただ?」

「今日は正月なので、殆どのSPが休みで……朝ともかく、夜はないので、行こうにもいけないんです」

「大丈夫ですよ。さっきの通り、僕が行きますから」

「ですから、部外者に頼むという事は「大丈夫です!」……え?」

「だって、あの人は僕にとって命の恩人です!だから助けます!借

りは返さなきゃいけないので！」

力強く言い返した。助けるのは当たり前だ。咲夜さんに声をかけられてなければ、俺はもう、外国の密輸船なんかに乗っちゃったりしてるかもしれないし。

「分かりました。けど、どうやって行くんですか？」

「そりゃ決まってますよ。大体、中学生がバイクの免許なんてまあ持って……ないですから、アレで行くしかないでしょ」

実は色々あって一応持ってたりする俺

「アレって？」

「そりゃもう……」

自転車に決まってるでしょう？」

その瞬間メイドさんが凍りついた

「え？どうしたんですか！？」

「自転車……ですか？はい、分かってます。ナビゲートは私がしますので心配しないでください」

あきらかに作り笑顔のメイドさん。そう言ってこの部屋から出てくる時にもうダメだ……とか聞こえたのは気のせいではなからう。いや、あえて気のせいだと信じる。これがハヤトクオリティ

車の車内、そこには、あきらかに誘拐されたと思われる少女――
愛沢咲夜と、あきらかに誘拐したと思われるサングラスかけたチャ
ラ男が二人いた

「で、ウチを使ってなにしようとしてん？アンタ達」

「そりゃ決まってる。身代金要求だ。お前の
家は金持ちだしな。ざっと二億は要求してやるぜ。楽しみにな」

「おお、兄貴。夢が大きくて惚れちまうぜ」

「よせやい。テレるじゃねえか」

そう言つて笑い合う二人。正直そこには同性愛のなにかを感じてしまった咲夜はその他に、安心して居るところもあった。

それは身代金の大きさだった。百億単位をとられると、一応色々支障が出てくるから心配していたのだが、二億だと、支障は出るかわないかの差で心配する事はなかったのだ。そこで、咲夜はなにか面白い事をしようと考えて、このお題を出した

「なあ、誘拐犯」

「あ？なんかようか人質」

「ウチもつすぐ死ぬかもしれないやん」

「ああ、そうだな身代金を出さなかったら殺すしかないしな」

「そこでウチ、お笑い好きやから最後の晩餐の代わりにウチを笑わせてくれや。そうしてくれたら、なにも残さず逝けるで」

そう言つと、兄貴の方は得意気になつて

「は？まあいいだろう。俺の特上のネタでお前を笑わせてやるぜ」

「マジでやるんすか？兄貴つて人を笑わせるセンス「うるせえ！！」笑わせると言つたら笑わせんだよ！」了解つす兄貴」

「ほう、自信あり気な様子やな。はよ言ってみい」

「はっ！言われなくてもやってやるぜ」

そう言うのと、車の中にしんみりとした空気が流れる。何故こんな空気がなったのか、疑問に思うかもしれないが、今となってはどうでもいい事である

「行くぞ」

車が来るまで待ってるかー」

「……………」

「……………」

二人の頭の中にえ？という言葉が生まれる

「えーと、それってまさか……………」

「い……………一発ギャグっすかね？」

「そうだけでも、これ上手くね？」

「……………」

「う……………ウマイっすもう最高っすよ兄貴！！」

「そうだろ、そうだろ？このギャグは結構かんがえたんだぜ。嬢ち

「やんはどうだい？」

「……ゴメン。全然おもしろくない」

その瞬間。兄貴の方からピキッ！という音がでた。

「なんだと……」

「大体一発ギャグって、こういう時はネタを瞬時にかんがえて二人で言うもんやろ？一人
でやるならもつとおもしろいネタを考えろや」

「……てめえ、今、自分の立ちどころが分かってねーよだな」

「分かつとんねんけど、お笑いに関しては別や、どんな時でもお笑いに関しては厳しいで！」

「そう言うのを……立場が分かってないと言っただよー！」

いきなり、兄貴が殴りかかろうとした時、車の前には一人の少年が自転車にまたがっていた。

「咲夜さん！助けに来……」

「あぶねえ……」

「ハヤト……」

その少年は出て来た途端、車に正面衝突してしまったのだ。

転生者のごとく！

～完～

*
*
*

「って、終わらせんなよ……！」

『どづしたんです？』

「いや、未来のナレーションに突っ込みを」

『はあ………というか、自転車ってそこまで早さでるんですね』

今、自動車を追いかけてます。自転車にカーナビついてた事にびっくりしたけど、今それに感動してる場合じゃないんで、ダッシュしてます

「いま、力抜いてますよ。入れすぎると通りすぎるかもしれないので一応力を抑えているんですよ」

『ハハ………そうなんですか。というか前にもう目的の車があるんですけど………』

「マジっすか？結構早かったってか………あそこだけ、寒い空気が流れてるんですけど………」

『気のせいですよ。さあ早く行きましょうラストスパートですよ！』

「了解！」

そう言って車にさらにスピードをかけ、車の上をジャンプする！！

「咲夜さん！助………グハッ！」

ヤバイぶつかっちゃった。もう俺の人生終わりか………

「ああ、ハヤトに生命保険をかけといて良かった。これでまた思っ存分ギャンブルできる！」

「良かったわねアナタ」

「ハハハハハハハ」

いや、終わらせる訳にはいかねえだろ！！

「うおりやあああああ！！！」

「轢かれてなんで立てるんだよ！！！」

「主人公補正なめんなあああああ！！！」

「良かったわ……」

車のガラスを正面から割り血まみれの顔で一言

「咲夜さんを返してくださいね」

「は……はい」

これにて、誘拐事件は終わりを告げた

「はぁ……大丈夫？咲夜さん？」

「ウチは大丈夫やけど……アンタの傷の方が危なそうやないか!!」

「いや、借りは返すのが俺の信念だから。出来れば住み込みの家を探してくれると……嬉し……」

数十分後、流石に我慢できずに倒れてしまった、ハヤトに応急処置をしていると巻田と国枝が現れた

「すみません。私達が休んでたせいでこんな事に……」

「いいねん。ハヤトが守ってくれたし。殴られるところやったんやで？そこにハヤトが自転車で車を飛び越えたんだけど、……」

咲夜はハヤトを大変気に入ったようで、ずっとハヤトの武勇伝を話していると、流石にずっとはマズイので、国枝が割って入った

「それで、この乾ハヤト。どうしましようか?」

「ああ、ウチの執事にさせるわ」

「え? ホントですか?」

巻田が驚いたような声を出す

「なに驚いてん。どうせ住み込みの家を探していたんやし、丁度いいやないか」

「ですがお嬢様」

「なにか文句あるん?」

「ございません!」

という訳で本人の知らぬ間に話しが着々と進んで行ったとさ

最終的に助かってしまう主人公補正は最強（後書き）

最後がちよつと投げやり感だしてますが、この結末しか思い浮かび
ませんでしたので、すみませんでした！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2436ba/>

転生者のごとく！

2012年1月8日18時48分発行